駿台大阪校 wiki 的「駿台生の心構え」

はじめに

通期授業は前期 11 週・後期 13 週と後期Ⅱ期に 1 週行われる。ほとんどの平日・祝日は授業日であり、進度が遅い場合は土日や学期末に進度調整補講が実施される。また、時間の都合上通期で扱えない分野もあり、その分野は主に土日に行う特別授業や添削指導、講習(特に夏期講習)で扱う。**授業は 1 コマ 50 分**であり、基本的に英数国は 1 コマ単位で、理科・地歴公民は 2 コマ単位で実施される。但し後期Ⅱ期は全て 2 コマ単位で、化学・政経は講義型、他の科目は演習型の授業を行う。**英数国は、**基本的には**前期で基礎を中心に分野全体を学習**し、**後期に**基礎を確認しつつ**応用力を養成**する。**理科・地歴公民は一年を通じて基礎を中心に分野全体を学習**する。

教材について

まず大前提として、**駿台の全てのテキストは**教「材」であり、講師が講義で学習内容を伝えるために用いる「材料」、「素材」である。そのため、基本的に**必要最低限以下のことしか書かれておらず、授業と合わせて初めて真価を発揮する。**担当講師の「授業力」が問われるが、**生徒も一生懸命吸収しようとする姿勢が欠かせない。**特に理系科目の『S 教材』は、担当講師が学習内容の背景にある理論を語らずにポイントや解法を重視した授業を行うと真価が発揮されない。

通期教材は『基幹教材』『センター対策教材』『テスト演習型教材』『大学別教材』の 4 つに分かれており、クラス・コース毎に扱う教材が異なる。**『基幹教材』と『センター対策教材』は駿台での学習の主軸となる教材**である。必要事項を一通り扱うことから、**マスターすれば確実に実力が付く**ので、十分な準備の下で授業に臨み、**前期・理社は復習を徹底、後期の英数国は**、応用力・実戦力養成のために**予習を重視**したい。また、必要事項を一通り扱うという性質上、特定の目標を掲げる講習講座より優先度の高い場合が多いので、**通期の復習が最優先**である。

クラス担任を中心に、「駿台のテキストだけやっておけば大丈夫」的な発言をよくするが、配布されたテキスト、個人の実力、志望校の入試問題の難易度によっては**各自の自習で補う必要もある**ことは認識しておこう。

なお、『センター対策教材』とは、通年の現代文・古文・理系地歴公民・文系理科、後期の漢文、後期に SS・MS・LS クラス以外が扱う英語のことである。

『テスト演習型教材』は授業の前半でテスト演習を行い、後半でその解説を行う。1 コマで行うものと 2 コマで行うものがある。通期授業では大学別テスト演習などが、後期Ⅱ期の授業では殆どの講義がこれに該当する。授業中に解き切ることより**復習が大切**。

『大学別教材』は志望大学別にその大学の傾向に合わせた教材。**実戦力養成のため**、これも**予習に時間を掛けよう。**

筆記具

授業スタイルは講師により様々、駿台では多くの講師に教わるので、チョークの色に対応して**色ペン 5 色**(赤、青、橙、緑、黄、桃)・**蛍光ペン 5 色**くらいは準備しておきたい。充実したプリントを配る講師が多く、**細めの色ペンの方が書き込みやすい。**

ノート類

授業用ノートは各授業(≠各教科・各テキスト)**につき 1 冊**を目処に作ると良い(ノートをまとめるとテキスト・§がバラバラになり復習しにくく苦労をする)。但し、駿台は 1 日に行う授業の種類が多くて荷物が非常に重いため、失くさず管理できるなら**ルーズリーフが良い。**

特に、数学の基幹教材は§1〜4(3)に分けて別の講師が同時並行で進めるのでルーズリーフを推奨。セクション毎にノートを作ると多量のノートを持ち運ぶことになり大変である。ノートに拘るのなら、ツイストリングノート(Twist Ring NOTE)を使うなどして1つにまとめ、必要な部分だけ取り出せるようにしておくと良い。**読解系のテキストは**復習で解き直すことを考慮して**書き込み無しの本文を取っておくべき**。そのため復習用の本文再掲がテキストに無ければ、テキストに直接書き込むのではなく**予めコピーを取ってそこに予習・板書すると良い**。それで板書しづらいならルーズリーフを推奨。コピーと一緒に挟んで管理すると上手くまとまって便利である。現代文、古文、漢文はプリントと板書を組み合わせて授業する講師が多いので、ノートよりファイルにまとめて保管できるルーズリーフが便利。**理科や地歴公民はプリントで授業をする先生が多く**、数枚のルーズリーフで事足りる場合があり、ノートは不要なことが多い。**各講師の授業スタイルは駿台大阪校 wiki に記載されているから一読しておくと良い**。通期の**テスト演習型の授業も**、解説の板書が少ないので**ルーズリーフで事足りる**場合が多い。テストと一緒に挟んで管理すると良い。プリントやコピーはクリアファイルやクリアポケット、キングファイル等で管理すると整然として良いだろう。B5 サイズで OK。なお、**寮生は入寮の前に十分な文房具代を親から貰っておくこと**。

授業

授業中は「ただノートを丁寧に取ること」ではなく**「授業内容そのもの」に意識を向けるべき**である。ノートを丁寧に取ると授業内容が印象に残りやすくはなるが、それは決して理解が深まっているわけではなく、ただ板書内容が丸暗記されているだけかもしれない。一昔前に『東大生のノートは必ず美しい』という本が話題になったが、実際、本当に優秀な生徒は板書や口頭説明を高速で写して授業内容に集中しているので、ノートはかなり汚い事も多い。ノートを取ることに集中し過ぎると、講師によっては口頭でなされた重要事項、考え方のポイントが抜けてしまう場合も考えられる。駿台の授業は概ね、プロセスを重視した学習法と解法を伝える「講義」であり、特に**論理関係や構造を理解することが重要**である。

要項説明では、各項目内の意味内容や論理関係の把握はもちろん、**学習内容の構造性を見通しよく俯瞰できるようになるのが望ましい**。

この際、科目全体に共通する見方や体系の最も根源的な出発点など、本質を突いて全体を見通すことが重要である。

問題解説では、要項通りのプロセスや汎用性の高いプロセスを押さえつつ、最もシンプルなプロセスを追求することにより、**要項の理解を確認しながら対応の幅を広げつつ、真髄を考究することが重要**である。

なお、理解した内容を整理することで吸収率が上がるが、駿台の講義は非常に濃密なので、**授業中は理解を最優先**にすると良い。

メモは余裕があれば講義ペースに合わせて、多くの場合は**理解優先のため手早く簡略に自分の理解に沿いながら**取るのが推奨される。

メモを手早く取ってできた僅かな待ち時間で講師の口頭説明に集中したり授業内容(特に論理性)を解釈したりすると良い。

また、**論理関係や講義の流れが辿りやすいよう矢印などを用いてメモを取ったり、把握した構造性や本質を該当領域の内容を括りながら脇に記したりすると、理解しながらメモが取れる**。メモは復習の補助に過ぎないので、**略字や略説で手早くメモを取るのも良い**だろう。もし、メモを書いている途中でスペースがなくなったり、速記し過ぎてノートが(復習する気が起こらないほど)あまりにも**汚くなってし**

まったりしたら、それは仕方がないことなので、**内容が頭に残っている内に**、綺麗とはいかなくても時間が経った後でも十分読み返せるくらいに**書き直すことも考えよう。ルーズリーフはこれができるので良い。**

予習

多量の演習で問題に慣れつつ必要事項を補充習得しながら学習を進める演習重視の方法もあるが、**駿台の授業は概ね濃密な「講義」であり、背景理解を一から組み立てていく理解重視の方法が主流であるから、「授業の予習」と「授業の復習」の重要度が一層高い。**

「授業の予習」は下準備に当たり、その目的は授業での理解能率を高めることにあるから、一般的に講義問題を事前に考えておくことはもちろん、**必要であれば手元の教材で要項や基本演習にまで立ち返る**ことが原則である。

「授業の復習」は授業を利用した学習プロセスの中で最も重要なステージであり、その目的は**第一に学習内容の再確認、第二に学習内容の体得、定着**である。なお「授業」そのものは仕入れに当たり、自分ベースでの学習にならず吸収率が高まりにくいから、授業前後の自学自習の重要度が高いのである。ラーニングピラミッドによれば、最も吸収率の高い方法は人に教えることとされているので、自学自習は一般に「自分ならどう教えるか」を常に考えながら行うと良い。

「授業の復習」の一般的な作業としては「復習(input)」と「演習(output)」がメインである。**「復習(input)」とは**第一の目的:学習内容の再確認のために行うもので、原則的に講義の流れ、即ち論理関係延いては論全体の理解の道筋を辿り直す中で、構造や本質を捉えて知識を的確に整理し、**学習内容全体を見通し良く把握し直すこと**であり、要は板書メモを使った講義の振り返りである。**「演習(output)」とは**第二の目的:学習内容の体得、定着のために行うもので、**理解や知識など内容単体の再現及び使う練習**(＝基本演習)と、**知識や論理を使った思考プロセスの構成とその表現**(＝応用演習)からなる。

なお補足として、最終的に学習内容を自らの思考に不自由なく応用できる状態を目指すために、短期的には次のステップの学習をスムーズに行うために、あるいは問題演習で先を見通すために、**基本演習はなるべく数多くこなし、**これにより知識や公式や解法や定石などについては頭を使わず無意識で処理できるものを増やして、応用できる領域を拡大しておく、即ち**「体得」しておくと良い。**更にエビングハウスの忘却曲線によれば、忘れかけたタイミングで復習すると定着率が上がるとされており、初めの 1〜2 回は特に適切なタイミング(20 分後〜24 時間以内、1 週間以内)で復習すると良い。その後は一例として、1 ヶ月後、3 ヶ月後に復習すると良い。記憶の干渉による吸収阻害も考慮し、**学習内容は確実に復習し、疑問点を寝かしておくならその内容を予め明確にしておくと良い。いい加減な印象が後の学習に影響を与える**のである。

授業の予復習の具体的な方法は、テキストの前書きや担当講師の指示(初回授業等)を参照にし、分からない場合は遠慮なく担当講師に尋ねておくと良い(特に現代文の方法論)。

しかし一般的に、予習はメモを残し、復習時に間違いのポイントを確認出来るようにすると良い。

また、板書メモに必要事項を付け足して情報を一元化し、予習メモは破棄すると良い。

復習は予習メモと板書メモを使い、授業内容の確認(=理解の道筋の辿り直し、ポイントとなる知識の整理、間違いポイントの把握など)を行いつつ、板書メモの加筆修整(=説明の補充、情報の一元化、後で解読できるメモ作りなど)行うと良い。その後、授業問題を自力で解き直し(=理解や知識の再現及び使う練

習)・自習問題などで追加演習(=体得・定着のための基本演習、応用演習)を行うと良い。
また、英語は教材が多くて情報が散逸しやすいので、復習で整理し直して情報を一元化するのも良い。
復習は時間を掛けるのも良いが、回数を積む方が大事。繰り返しても忘れるポイントは別にピックアップし、細切れの時間(下述)も使って speedy にポイントチェックを繰り返すと良い。

自習

細切れの時間(通学時間や学習科目の入れ替え時、就寝前の時間など)とまとまった時間を準備すると良い。
細切れの時間では単語帳やポイントチェック等の知識確認など**軽い学習**、**まとまった時間では駿台生の自習のメインとなる授業の予復習や参考書等での学習**を行うと良いだろう。
平日にその日の予復習をしようとしても時間が足りず消化不良になる可能性が高いので、
「早い内に一気に全授業の予習を最終回まで終わらせる(この時はまだ復習を始めなくて良いが、板書が解読不能にならないよう、必要ならば当日分のみ軽くやっておく)→1 回目の授業から復習をする(授業に追い付いた場合は授業の日毎にその日の復習をする)」
もしくは
「土曜日(模試の無い日は日曜日も)に次週の予習をする→授業の日毎にその日の復習をする」(杉山義明先生談)
等のようにすると良いかもしれない。
但し前者の場合、授業でもプリントでも全く触れられない部分を予習して無駄にならないよう注意。(特に国語)
また、前期の現代文は読解法を指導するので、予習で読解法の練習をするために、先取りは控えた方が良い。
英単語や古文単語などは自分で補うこと。これらは試験直前に短期間で対応すべきものではないので、短期集中型ではなく長期継続型の学習方法を推奨。
英単語は CD を利用してマンブリングすると、リスニング対策にもなり効果が高いだろう。
特に**二次でリスニングが課される場合、前期から各自で対策を始めておく**こと。
特別授業でもリスニング対策テストがあるので、そちらも検討すると良い。

模擬試験

模試は結果よりも復習が大事。『基幹教材』の復習が最優先であるが、この復習の優先度も高めなので、忘れないように早い内にやるべき。